

二次元ぷち文庫

試し読み版

お嬢様
お嬢様 TRIPLE

トライアングル
extra

兄妹蜜戯・お風呂編

空蝉

表紙イラスト：鮫葉いくや

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『お嬢様トライアングル extra 兄妹蜜戯・お風呂編』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『お嬢様トライアングル』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



OJYOUSAMA
お嬢様IGLE
トライアングル
extra
兄妹蜜戯・お風呂編

空蝉

表紙／鮫葉いくや

登場人物紹介

Characters

しんどうえいいち

神藤英一

両親を亡くし、親戚の家に引き取られて理奈と出会う。ごく普通の純朴な少年。

りな

神藤理奈

英一の義妹で、アイドルの人気を持つ弓道少女。英一に想いを寄せているが、素直になれない性格からついキツく当たってしまう。嫉妬深い。

だいぐうじ

大宮寺たまき

英一の同級生。英一に好意を持っている。

ゆかり

大宮寺 縁

たまきの姉。英一のマゾ体質を見抜き、ちょっかいをかけてくる。

風呂。それは一日の疲れを癒やす場所。トイレと並んで落ち着けるプライベートルーム。「ほう……お湯加減は今日も最高」

目一杯足の伸ばせる広いバスタブに張られた若干熱めのお湯。肩までをどっぷりと浸からせ、顔をばしゃばしゃと洗ってみたりなどもしつつ。腰にタオル一枚巻いた半裸を浸した熱湯にほっと一息、気の抜けた呼気を吐き出す。

けれども青年——神藤英一しんどうえいいちはどこかそわそわと、眼鏡を外したせいでぼやける視界を慌ただしく移ろわせ続けていた。

——がらッ。

「お待たせつ。お兄ちゃん」

擦り硝子越しにも気になっていたシルエットが足をぴたと濡れたタイルに着けると同時に、涼しい風が浴室内に流入する。そして今日も、淫蕩で悩ましく、どこまでも兄を誘惑する愛しいツインテール娘の声が、風呂場の湯気と熱気に満ちた空气中に響いた。

「ふふん。どう、今日の衣装は？」

(どうって……今日は一段とまた……き、きわどい)

いつの間にか、こうして義妹と共に入浴するのが常となつて久しい。そのこと自体にはようやく慣れ始めていたのだが、今日の彼女——国民的人気を誇る弓道少女であり、奇遇にも英一の義妹となつた少女、神藤理奈りなの姿格好はあまりにも刺激的だった。

「んん？ 不満なの？ それとも……見とれちゃってる？」

ぐっと背を反らせ切れ長の瞳で見下ろされると、マゾヒストの業か背筋がゾクゾクする。さらに慎ましやかな胸元を包むスケスケの白く頼りない水着に、締めつけられた乳首がポツチリ浮き出るのを目の当たりにしては、見るなという方が無理だった。

「うん、見とれてる……」

素直な返答に小柄な義妹が自慢の金髪ツインテールと兄の手にすっぽり収まるサイズの乳丘を揺すって頷いたのを目端に止め、より一層視線を少女の半裸に集中させる。胸の鼓動は一足飛びに跳ね上がり、湯船では腰に巻いたタオルの下でムクムクと欲望の証が鎌首をもたげ始めていた。そこに、確実に義妹のツリ目が視線を集めていることを自覚しつつ。

（う、うわ……股も、透けかかっている……う！）

白のヒモ水着。それもマイクロピキニと呼ばれる、股間の中央部と乳首まわり程度しか隠せないタイプの極少水着を身に着けた愛妹の姿は、ほとんど裸身と変わりが無い。なだらかなカーブを描く肩先から胸元にかけての曲線は丸見え。八割がた脇からはみ出た乳丘の中心で、唯一三角形の白布地で包まれた突起の桜色が透け、ツンと押し出ている。

長い股下から少し視線を上へとずらせば、肉付きの薄い小柄な身体の中で一番ふつくと柔らかく女性らしいカーブを描く恥丘の中心——横幅十センチ程度のみを覆う白の薄布。薄生地一枚隔てた向こう側で、薄めの金糸が一本一本縮れ、固まって押し込められている

様までが克明に見て取れた。

(ごくり……わ、割れ目まで見えちゃいそう)

「見えないわよ。割れ目は。そういう作りだもの」

ドキン、と胸が鳴り、湯船の中で跳ねた腰が思わず波を立てた。内心を見透かさされるほどがつついた視線を突きつけてしまっていたのか。慌てて緩んだ顔面を締め直す兄に、頭の回転の早い義妹は満面に浮かべた小悪魔チックな微笑で攻勢を仕掛けてきた。

「見たいのかなあ……毎日見せてあげてるのにね。そんなに見たいの……？」

最近妙に色艶と丸みを増した腰をくねくねとシヨードンサーのように揺らして広さ三畳ほどの浴室を横断し、徐々に兄が浸かるバスタブへと近づいてくる。瞬く間に距離が縮まるとに従って、少女の吐息が熱く、乱れてゆくのがはつきりと感じられた。

風呂場という日常の場所で行う淫靡な儀式に。そして虐められるほど従順に喘ぐ兄の姿に生来の征服欲を刺激されて。理奈も肉欲に溺れ、感じているのだ。

「今日のために、わざわざ通販で探して買ったんだから。んふあ、お兄ちゃんつたらすつごいネチツこい目つき……まるで盛りのついた動物、みたい……ああ……」

お兄ちゃん。そう甘く囁くように呼ばれるたびに、小さな罪悪感と、小悪魔チックな少女を占有できる悦びに股間が疼く。実際は、英一自身も日々理奈の蠱惑的魅力に惹き寄せられ、虜にされてしまっている。

兄も義妹も、互いの肌を触れ合わせ愛を確認する行為に溺れていた。

「り、な……っ……っ……」

ついにバスタブにたどり着いた義妹の腰がクイとせり出し、鼻先にまで白水着に包まれた股間が迫ってくる。湯船から身を乗り出し、下腹部がへりにぶち当たってズクンズクンと疼いたが、気にしている余裕はない。今は目前の光景に全神経を集中させたかった。

手を伸ばせば届く距離に、金色の恥毛を透かせた小さな布地がある。指一本引っかけその布地をほんの数ミリ脇にずらすだけで、何度見ても飽きのこない義妹の股間を拝むことができる。何一つ覆い隠す物のない至近距離で、くつきりと刻まれた縦スジも、その奥に潜む桃色の粘膜と鬚の詰まった肉壺も、心ゆくまで視姦することができるのだ。

「はあっ、はあ。はっ。あああ……」

「わ、く、くすぐりたい。あははっ、すっごい鼻息……。お兄ちゃんたら妹のエッチな水着姿で、昂奮、しちやってるんだあ……」

わずか数センチ先。それほど近くで凝視しているというのに、少女の縦スジのみを見事に覆い隠した白布地は、内に潜む恥裂のシルエツト以外映してはくれなかつた。

「二オイ嗅ぎたい？　でも、ダメ。見えそうで見えないよね……。でも、ずらすのもまだダメよ。まずは私が、お兄ちゃんにオシオキ、しちやうんだから……。ね？」

ドクン。耳元で囁かれた誘惑に、また心臓が高鳴る。いつもの、儀式。今日学園で行わ

れた淫蕩行為を一つ残らず白状させられ、それを理奈が再現する。独占欲とSツ気の強い義妹が考案した、兄の羞恥とマゾヒズムを煽り、かつ兄妹双方が最大限快楽に浸れるエッチな告白と行為。

（か、嗅ぎたいよっ……触りたい、隠れてる股の奥まで、全部見たいよ理奈あぁっ……！）
 禁止されるほどに、青臭い欲望は燃え盛る。年下の美少女、それも義妹に命令されて我慢する。そのことに恭順している自分を顧みて、堪らなく股間の膨らみが疼くのを覚えた。
 「つく、あ……!? わわわ……」

肉欲棒に持ち上げられるタオルが外れそうになり、慌てて右手で結び目を直すと、くすりと微笑む少女の微笑が頭上で響く。柔らかさを増した、天使の如き微笑。

確かな愛情を感じる理奈の微笑みに、カッと熱を持った胸と股間がしきりにドクドクと呼応する。のぼせたわけでもないのに頭がぼおつとして頬がほんのりと染まり、目の前の肢体以外は目に入らなくなってしまう。

（り、な……理奈、リナリなあぁッ！）

兄の昂奮を読み取った義妹もまた、弾力のありそうな頬を桜色に染めて、情欲に潤んだ大きな瞳で一直線に愛しい男を眺めていた。

「あふ、うん……。たまきさんや縁先生ゆかりに、エッチなこと今日もされたでしょう……。今日は、どんな風にされたの？ 全部、隠さずに告白するの……私がそれよりもっと気持ち

少女の蜜に呼び覚まされ、再び激しく脈を打つ。

「やあ……あんん、ドクドクしてるの……オマ○コでじかに感じるうっ」
兄の欲情をそそるために、わざと淫語を口走る。淫らで、愛しい義妹の頬はのぼせたためか、それとも己が放った淫靡な台詞に恥じ入り、なおかつ自身の欲情まで煽り立てられたのか。熟れたリングゴのように赤く火照り、蕩けた視線で見下ろしてきた。

少し前屈みで腰を揺らす義妹自慢の金髪ツインテールが、ふあざりと胸板に垂れて英一の乳首をこそばゆくさせる。

「あ、理奈の髪の毛……ふ、あ、くすぐったあ……」

「ホ、ホント……お兄ちゃんは私の髪の毛が好きよね、あはあつ……。でも、髪でコキコキするのはまた今度、よ……。今は……あんんっ、お股で集中してつ……。んん、んっ！」
ずりゅんずりゅりゅっ！ ずにゅっ、ぬこっ、ぬぢゅぬりゅう……。

ローションなど必要なかった。触れあい熱を共有する互いの股間から染み出た天然の潤滑油が摩擦を減らし、より強い密着感でもって兄と義妹を繋ぐ。唯一障壁となった白のヒモ水着を擦り切ろうとするように腰を押しつけ、グリグリと八の字に回転させられる義妹の秘裂。そのプニプニと弾力に富んだ感触はもちろん、骨盤の上辺りに感じる臀部の温もりと柔らかさも、充分以上に兄の情欲をそそった。

「変態で可愛いお兄ちゃん……わ、私の太腿もオマ○コ肉も、大好きだもんね……あつ、

は、ああふつ、ガチガチおちんぼ擦れてるうう……」

部活動時愛用のスパッツで、ピンク色のパジャマで、スクール水着、ブルマ、時にはTバックショーツの時もあった。ありとあらゆる布地と場所で、義妹の股下の感触を味わった。膣内への挿入を餌に、結局太腿の圧力に搾り取られたこともままある。そんな時、決まって理奈はイヤらしく歳不相応な艶美さを纏い、愛しげに見つめてきてくれる。

「うんっ、太腿も、ぷっくりしたピラピラもっ……好き、大好きだよ理奈あつ！」

ぬりゅんッ！ぬかるみに滑った義妹の腰が一瞬ピクリと小さく震えた。先走りを吐きつける亀頭を感じた硬い、豆粒に似た感触。おそらく義妹のクリトリス——性感帯の一つを強く擦ってしまったのだろう。

「っあ！ふあ、あつ、ああひ……い、今のちよつと軽くイツちゃった、かもお……」

ビクン、ビクンと白い薄布の奥で肉唇が跳ねている。少し頭を起き上がらせ、結合部の淫態をしかと網膜に焼きつけた。ヒクつく淫唇はねつとりとした蜜を生地に染み込ませ、吸収率を超えた分の粘性汁が英一の股間の茂みを湿らせる。胸元の頂同様ぼつちりと浮き出た小指の先程度の突起が、まるで生地を剥がして出して欲しいと願うようにプルプルと震えていた。

「り、なアアっ……はっ、は、はあ……ッ！も、もう僕……！」

蕩けた表情、耳まで真っ赤にして口端からだらしなくよだれを垂らす恋人。その姿を見

つめるだけで浅ましい肉棒はムクムクと凶悪に膨らみ、硬直した先端で白水着の股布を抉る。我慢できない。早く、ねっとり潤んだ肉襷をめぐり擦って、待ちわびる子宮の入り口に肉と肉のキスを繰り返して浴びせてやりたい――。

「くう、ん。エッチな目で見てるうう……。私と、シタイの……?」

「うんっ、うん! したいッ! 理奈のオマ○コで、お尻でもだよッ! ずぶずぶ奥までちんぽで味わいたいよッ……!」

浴室で反響する義妹の台詞が終わる前に、即答した。ふっと緩む義妹のツリ目がちの目尻。お礼とばかりにクイクイと揺れる腰の下ではネチャネチャと蜜が糸を引いては、下敷きの肉幹と包皮を刺激する。蜜で張りついた淫肉が、左右で挟み込んで押し潰す肉勃起の突端を、キュウキュウと締め上げてくれた。

「私もそろそろお兄ちゃんのおちんちん、欲しい……。かも。はう、ああ、でも、その前に……私のお尻の穴も濡らしてくれるよね……。お兄ちゃん?」

「ん、分かってるよ、理奈……。理奈にしてもらったみたいに僕の舌で……」

僕の舌で、理奈の腸内隅々まで綺麗に舐め尽くしてあげる――。チロチロとイヤらしく蠢く、義妹の赤舌。義妹の淫靡な表情に魅せられつつ、英一は要求された内容を繰り返し、高鳴る心の中で反芻していた。

「そ、それじゃ舐めるよ……」

互いの位置を入れ替わり、兄妹は再度視線を絡めあう。今度は理奈がバスタブのへりに胸元を押しつけるようにしてうつ伏せでもたれかかり、膝立ちで兄の目前に剥きたての桃の如き臀部を突き出していた。

兄は風呂椅子に腰掛け、まじまじと目を凝らして尻谷中央の窄まりを見つめる。薄く頼りない布切れすら失って、真正正銘の剥き出しとなった桃肉の丸みを帯びた、少しだけ子供っぽく角の残ったフォルムに、目を奪われぬはずがなかった。

「あう、息がかかつて、るう……！」

右脇にずらした白い布切れはたぷりの水分を含んでくちやくちやになりながら、尻肉の上でテカテカ濡れ輝いては淫蕩な甘酸っぱさを漂わせている。

「はっ、はぁ、凄いいニオイ……酸っぱくて、ムレムレでっ……！」

ヒクヒクと蠢く窄まりに目を奪われつつ、鼻孔は食欲に牝の臭気を吸い込んでいく。くすぐったさと匂いを嗅がれる行為そのものに昂奮した肉穴が股下で蠢動を強め、トロリと濃い目の蜜を吐き零したのを、視界の悪い中でも裸眼ではつきりと確認した。身体全体が小ぶりな少女は肛門まで小さな作りで愛らしく、ぷつくりと突き出ている。

「こ、こらあつ……あくう！ お兄ちゃんのくせに焦らすなんて、卑怯よ、あッ……」

待ちわびた桃尻がふりふりと左右に揺れた。滴る蜜を振り撒き、プンと漂う淫臭がまた一段と強く浴室内でわだかまる。牝の獣欲を促進する香りにそそのかさされ、剥き出しの股

間で肉棒がビクビク跳ねては要求する。早く。目の前の肉の味を確かめたいと——。

（理奈のアナル……どんな味がするんだろう、他の誰も知らない、僕だけの味……！）
 ぱくぱく口を窄めて待つ義妹の排泄穴。用を足す穴に口付ける、そのことに嫌悪感など全くなかった。湧き立つのは、期待と占有感。そして肉勃起に直撃しては蕩かせる、義妹が欲情しているという確かな機微、鼻先をかすめたイヤらしい匂いにいざなわれるように。心なしにヒクつきの間隔が狭まっているようにも思える肉穴に、いよいよ意を決して震える舌先を押しつけていった。

ぴちやあ……。苦い、少しピリッとした感触が舌先を襲う。

「ふあ……！ や、やあ、やつぱりこ、こんな恥ずかし……格好でツんくうッ！」
 とっさに逃げようとした尻たぶを、右手で水着のヒモ部分を摘んで捕まえる。先ほど理奈に受けたように、腰に左手を巻きつけて完全に逃走経路を封鎖した。

（苦っ、これが理奈のお尻の味……？）

もう一度確認するように、震える肉穴のシワの寄った周囲を、舌表面のざらつき全体を這わせて、二度三度とねぶり上げる。

「れるッれるるう！ じゅっ、ちろろッ……こふえが理奈のおひりのあじっ……！」

指に吸いつきそうなほどきめ細かな尻肌を優しく撫でさすり、ぐっと押しつけた鼻先で谷間を搔き分けては肉穴を突つつく。強く吸いついた唇で窄まり全体を食み、吸り上げる

と途端に尻肉がねつとりと熱を帯び汗ばみ始めていく。

「くあ！ ひう、あつ、あん！ ばっ馬鹿あ、いきなり、はげしっ……おしりの穴っ、やらしい音させてるよおっ！」

責めに回ると常に強気な彼女が、責められると案外弱いことを、誰よりもよく知っている。それもまた兄であり恋人である英一だけの特権だ。

あとに挿入することを考えて、しつかり、じつくり、時と愛情をたつぷりとかけてほぐしてやろう。固い決意と腰元から突き上がる肉悦の下に、義妹の小刻みに震える尻肉を再度撫でてやってから、いよいよ丸めた舌先を縮こまる窄まりへと突き込もうとする。

「あむ、んん、理奈。力抜いて……」

「わ、分かっている、わよおそんなのっ。でもっあひ、あうう、でもおっ……!!」

舌先で軽く、緊張する窄まりを押し込んでやる。弾力的な触り心地に感激して何度も繰り返すと、たちまちのうちに少女は尻を震わせながら甘い声を零し始めた。

ヒクつきながら開閉を繰り返す肉穴の向こうに時折覗く鮮やかな薄桃の粘膜の色が、まるで舌を誘っているようにも映る。タイルの上で震える義妹の脚にそつと手を乗せ温もりを伝えれば、強張りが目に見えて解けていった。

「あふ、お、お兄、ちゃあん……」

（たくさん濡らしてあげて、たくさん気持ちよくなってもらうんだ……!!）

振り向いた義妹の唇へと、緊張でカラカラに乾いた唇を押し当てた。

「んむ……ふう、んあ、ちゅっ、ちゅちゅ、ちゅるう……おにいひやあん……」

「ちゅぴ……っぶあ。動く……ね？」

まだ少しぎこちないキスにも微笑んでくれた義妹がこくりと頷いたのを確認し、くっついた腰を少しだけズルリと引き抜いていく。

「んく……！ はっ、ああ！ いなくなっちゃう、お兄ちゃんがいなくなってくうう……」

肉の楔を抜こうと腰を引くたび、名残惜しげに腸粘膜が締めつけを強め、けして離すまいと引き止めにかかった。カリの裏筋にまでチューチューと吸いつかれ、腰を引くのがためらわれるほどに強烈な甘い痺れが生殖器官を駆け抜ける。幹には尻穴性交の証拠が、掻き混ぜられ泡立った腸液がたっぷりと染みつき、独自の匂いを擦り込ませていた。

「うぐ、理奈っ、すぐに……すぐにまた奥まで戻るからっ……んん！」

——ずんツツ！

「あぐううッ！ んん——ツツ！」

幹の半ばまでを引き抜き、逆戻り——。今度は一気に反動をつけて、ほぐれきった肉穴の食欲な求めに応じるように強く腸内の壁を剛直で打ち叩く。すでに数えきれないほど交わり、すっかり牡の味を覚えて今も情欲のよだれを零す肉穴だ。遠慮はかえって、少女の快感を損なうだけだった。ビリビリと下半身全体に痺れが奔り、兄妹二人分の重みを支え

る義妹の脚が震えるのも構わずに、何度も何度も。

——ぢゅぷっ！　ぷぽぷ！　ぼぼっぼぷぷ、ぐぽおっ！

「あはあおっ！　はひ、ひい！　お尻、ツンツンされてるう！　おちんちんでっ、お兄ちゃんの形覚えちゃつてるよおっ！」

本来排泄のためだけに使用する肉筒から、秘裂からよりも重たくズンズンと腹に響く快感刺激を受け取って、義妹が腕の中で喜悅に咽び泣いていた。幼い尻穴は突かれるたびに締めつけを増し、粘つく腸液を潤滑油にすがりついてくる。つるりとした腸内の引っかかりのなさを補うように、ぎゅうぎゅうと狭い穴全体が牡肉を絞り快感を引き出してくれた。

「はうあつ、熱い！　くあ、理奈の中、今日もすごく熱くなってるう」

「な、なによっ。お兄ちゃんの、ん！　おちんちんだってえ！　私のお尻の中で……はっはうああ、火傷しそうなくらいアツアツになってるんだからああッ！」

——ぷぽんッぽちゅぢゅぷ！　クイッ、ぐぶぶっぶぷうう……！

うねる尻肉が勃起根元の黒い翳かげりに押しついてきて、八の字にくねっては進んで喜悅に喘ぎ狂う。普段の凜々しさとも、二人きりの時にだけ時折見せる甘えたがりな表情とも違う、潤む唇から蕩ける眼差しまで淫靡に染まった「オンナ」としての貌。

(……ッ！　だ、だめだ、そんな目で見られたりしたらっ……！)

見つめられるだけで下半身が溶けてなくなりそうな肉悦に脅かされる。ゾクゾクと背筋

を白い喜悦が駆け上がり、否応なく限界が近づきつつあることを知らされた。それは、肉と粘膜でじかに触れあう義妹にも伝わっていく。

「んんんあ……っ、いい、よ。一緒にイこつ……ずっと、ずっと我慢してたのおツ、一杯ズンズンしてくれたら、イケるはず、ああ！ だからあああああつ！」

——クリクリイッ！

不意打ち気味に、浴槽のへりとその上でたわむ乳肉の合間に滑り込ませた指先で白水着のブラを引つ搔いた。爪先に感じるコリコリとしこつた感触を義妹の勃起乳首だと見定め、重点的に繰り返し爪を立てて扱き、挟み、ねじって、潰す。

「はあ、はあつ……こんなポーズじゃなかったら、いつもみたいにチュパチュパしたげられるの……！」

グングンと膨張した肉勃起でぬかるむ腸内を突き上げながら、兄妹間では日常行為となつた乳吸いへの欲求を吐露していく。耳元で囁かれた義妹の腸内が一段とうねりを強め、また指先で摘まれた乳首がピクピクと何か訴えかけるように脈動するのをつぶさに受け止めて。軽く、ついはむようなキスを白いうなじに降らせる。

「ば、ばかあつ……そんなに義妹のおっぱい吸いたがるなんてえつ……ホントにしようがないお兄ちゃんッんん！ はっひあああ！ お乳ジンジンいいよおお！」

ガクガクと、理奈の膝の振動が激しくなった。ぎゅつとバスタブのへりを握り込んだ手

を突つ張らせ、しきりに押しつけてきた美義妹の尻肉の柔らかさに、腰が震える。

「だって、好きなんだッ！ 理奈のおっぱい、大好きだからっ……！」

堪らず掌を白水着の内に滑らせ、じかにもう一つの柔らかな膨らみを揉み込んだ。柔肉とその頂点にある突起に唇で吸いついていと夢想して、唇の代わりに指先で桜色のしこりを挟み、コリコリと歯で噛む代わりに指の腹で転がしてみせる。

「あぎゅっ……くうん！ お尻もっ、おっぱいもおっ、ピクピクが止まらないよおお！」
 乳房を伝う快樂刺激に身震いし、腰元まで痺れた悦楽の波に蕩かされながら。理奈のツインテールが垂れた先の湯船で波間を搔く。

「っは、はう……すっ、好きな、おっぱいだけなのおっ……？」

少しだけ不安の混じる声で。振り向かず少女の唇が震える声を紡ぐ。答えは、すぐに出了。ずっと、思っていることを舌に乗せて口にするだけなのだ。

「ううん、全部。理奈の全部がっ……好きだよっ」

パチャパチャと波打つ湯船を少女の頭越しに覗き、一層強く腕の中の温もりを抱き締める。密着した肉と肉が互いの熱で融合し、一つになったかのような感覚。にじんだ汗と汗が混ざりあい、腸液と先走りが掻き混ざる。

——ばちゅッ、じゅぶ、ぶじゅぶぶッ！

「ふっ、くああ、んんんう！ おしりっ、抉れて、めくれてるよおおおッ！」

ぬかるむ肛門内部の蜜を押し出し腰を突き入れれば、義妹の小ぶりの尻たぶが圧力でたわむ。ぷるぷると揺れる尻肉が愛しくて、覆い被さるようにくつついた腰で執拗に何度も腸粘膜の括れた壁を何度も、何度も叩いた。亀頭の抜けるのに合わせて掻き出された腸汁が、押し込まれた幹に滴り絡んでまた腸内へと戻されていく。攪拌された腸汁はカウパールの粘り気も加え、より濃厚で淫欲をそそる蜜となつて少女の腸内で溢れ返る。

(もう少しつ、あとちよつと……少しでも長く、理奈のナカにいたい……)

背中から腰骨を伝い、もう腸内を掻き回す肉勃起の半ば以上までせり上がつてきていた射精の欲求をはね除けるように、右手で掴んだ白水着のショーツをぐつと引く。

「ひあん！ こ、こらあ、脱げちゃうつ……千切れちゃうう！ あ、あとで酷いんだからねつ、あつああん、くあひいッッ！」

——ぬぷおおつ……。

「ごめん、理奈っ……」

耳元で今日何度目かの謝罪を囁き、腰を引いて肉棒を抜いていく。一時でも離れたくないのか追いつがつてくる小ぶりの尻たぶが、決して離さないとも言いたげにきつい締めつけで亀頭を絞る。ビリビリと脳髓を灼く白熱の疼きに堪えてさらに腰を引けば、ふりふりと左右上下にひねりまで加え、淫蕩な腰振りダンスで射精をせがみ、ギブアップを迫ってきた。

「あぐううっ……!! も、もお持たない、かも……!!」

ぞわぞわと腰椎を脅かす白熱はもう押し留めようがないほどに膨らみ、肉欲の楔をドクドクとしきりに脈打たせて、欲望の吐露を要求してきている。それを察知してよけいに締めつけとろみを増した腸粘膜がねつとりと絡み、吸いついてくるのが、より牡の欲望を煽り、増大させる。

堪えることなくきゆうきゆうの腸内に白い飛沫を噴き上げたら、どれほど気持ちいいことか。きつと我慢した小便を一気に放出した時の、何倍も。腰が蕩けるほど喜悦が奔るに違いない。すぎるような目で義妹の汗ばんで火照るうなじを見つめ、荒い息を金髪の髪束に吐きかける。兄の昂奮を見切り、同等以上に欲情に囚われた貌を振り向けて、淫蕩の義妹はそつと、さらなる欲望の煽情を狙い囁く。

「ひア、出る、のおッ!! あふ、ふああん! 出すなら、前の方に……オマ○コの奥でぴゅっぴゅしてえッ……!!」

——オマ○コ。膣内での射精。男として、牡としてこの上ない、種付けの誘惑。眩暈がするほどの喜悦と愛欲の波が、肉棒にいくつも太い筋を浮かせ、ぶわりと一際大きくカリアを膨張させた。

(理奈のオマ○コ、オマ○コの中で思いつきり出せる。射精できるッ!!)

——ぐぼおおおおッ……。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>